九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

近代移行期における日本産人参の輸出と中国市場 : 19世紀～20世紀初頭を中心に

童, 德琴

https://hdl.handle.net/2324/1806776

出版情報：九州大学, 2016, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

（様式３）

氏　　名　：童　徳琴

論 文 名　：近代移行期における日本産人参の輸出と中国市場
　　――19 世紀～20 世紀初頭を中心に――

区　　分　：甲

論　文　内　容　の　要　旨

従来、近世日本における薬種貿易史については、おもに日本への薬種輸入が検討の対象となり、明治期の薬種貿易については、西洋薬材の輸出入に重点が置かれてきた。しかし、薬用人参（以下、単に人参と称する）を始めとする伝統薬種については、近世から博物学・本草学の発展に伴い国産化が進められ、明治期には、政府の産業・貿易振興策のもとで、人参などの薬種生産の産業化が進み、製造会社のような新たな経営形態をとって、対中貿易における主要輸出品の一つとして発展していった。

ただし従来の研究では、近代移行期（19 世紀～20 世紀初頭）における日本産人参輸出については、もっぱら日本国内における人参産業史の一環として検討されるに止まり、その輸出先であった中国市場の状況や、中国市場において競合関係にあった、朝鮮産人参・北米産西洋人参などの輸出動向を視野に入れた研究はほとんどなされていない。このため本論文では、従来の産業史・貿易史医薬史研究の成果をふまえて、近代移行期における日本産人参の生産と対中輸出を、中国市場における人参需要や各国産人参の競合関係などの問題と関連して、包括的な検討を加える。

第 1 章では、日本産人参の主な輸出先である清朝が海外から大量の人参を輸入した歴史的・社会的背景を検討する。清朝政府は、中国東北地方における人参採取を独占し、その品質を維持するために、人参正根の栽培を厳禁していた。その結果、市場では人参の需要増大に対して、供給不足が深刻化し､需要と供給のギャップを埋めるため､海外から大量の参類商品が輸入されるようになる。本章では、こうした状況下で、中国市場に輸入された海外産参類商品の特質を、本草書の記述も参照して検証し、各国産人参の輸出動向について検討を加えた。

第 2 章では、日本における人参国産化に対する伝統医学思想の影響と、19 世紀前半における日本産人参の対中輸出の実態について考察する。近世の日中両国は、「温補」を重視する李朱医学の影響を強く受けており、「温補」の薬効を持つ人参の需要が増大していた。江戸幕府は人参などの薬種輸入の増大による金銀流失を防ぐために、人参の輸入代替生産を企図し、18 世紀初頭には人参の国産化に成功する。その後は天領の日光を始め、会津藩・松江藩などで人参栽培が発達し、18 世紀末からは長崎会所を通じて中国へも輸出されるようになった､19 世紀前半期には生産規模の拡大につれて、対中輸出量も増加していった。

第 3 章では、明治前半期（1868 年～1886 年）を三期に区分して、日本産人参の対中輸出動向を分析し、在来の人参産業が近代的産業への転換を図り、明治政府による殖産興業・貿易振興政策のもとで、輸出産業として成長していく過程を分析した。史料としては日本産人参に関する産業史料のほか、中国の税関記録を利用し、日本における人参生産の進展と、中国市場への人参輸出の連関に検討を加えた。さらに、1880～1886 年における日本産人参の輸出急減が、人参生産・製造が急

速な産業化の過程で過当競争に陥り、生産体制の混乱と品質低下を招いた結果であることも指摘した。

第 4 章では、明治後半期（1887～1912 年）における日本産人参の対中輸出動向と、中国産人参や海外産参類商品の供給状況について検討を加えた。本章では新たに朝鮮産人参も分析対象とし、日・中両国の貿易統計により、中国市場における海外産参類商品の競合状況を検証し、中国市場への参類商品の主要供給地が、北米から日本などの東アジア諸国へと移行していく過程を明らかにした。このような転換の背景には、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、日本産人参の生産・経営体制の整備と再編が進み、さらに近代的農学・薬学に基づく人参生産の改良が行われたことを指摘できる。

近代移行期の日本における人参産業の発展は、生産・経営の近代化と、輸出産業化という両面から進展していた。明治以降、日本においては西洋的医学制度の導入と、漢方医学の衰退により、人参を始めとする在来薬種の国内消費市場は縮小していった。しかし、人参生産は全面的に対中輸出産業へと転換し、朝鮮産・北米産人参と競合しつつ、中国市場においてシェアを拡大し、主要輸出商品として成長していった。このような発展過程は、在来薬種の産業化の一つの典型例とみなすことができるだろう。